

大人がかっこいい姿見せよう



「かっこよく稼ぐには芸術家だーと思って、絵描きになろうとしたんだけど、才能がなくてね。で、物書き」と話す山中恒さん。神奈川県藤沢市

5日はこどもの日。だが、現代を生きる子どもたちは、自分を好きになれず、もがいているようだ。そんな子どものために、大人ができることは何か。児童読み物作家の山中恒さんに聞いた。

2012.5.5 児童読み物作家 山中恒さんに聞く

—東京都教育委員会の調査では「自分のことが好き」と言う子どもは小学1年生で84%、中学2年生になると40%に下がります。

「小1なのに、もう自尊心を持ってなくなった子が16%もいるなんて、悲しいよね。でも僕の実感では、自尊心を持っている子はもっと少ない。『自分はこの世でたった一人の、かけがえのない人間なんだ』なんて、多くの子は考えたこともないのでは。いつも何かを押しつけられ、結果だけで評価されるから」

—親の責任でしょうか。

「育てる側の責任。例えば、国語のテストなんて選択肢ばかり。これでは、与えられないと選べなくなる。

枠の中で育てようとするから、子どもが自分なりの答えを見つける努力をしなくなる。だから予想外の事態にぶつかると、どうしてよいか分からない」

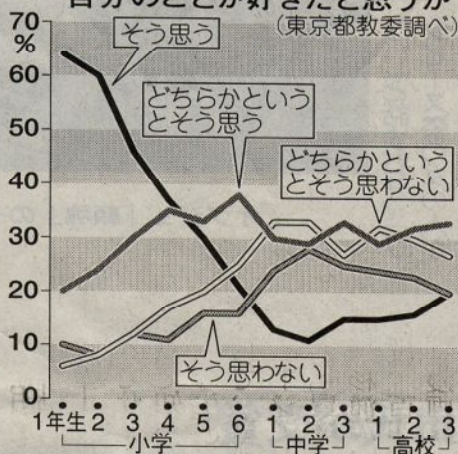
—どうすればよいでしょう。

「子どもに『夢を持って、自分を好きになれ』と言ったって、具体的なあこがれの対象を見せてやらなきゃ。僕が子どものころは、貧乏でもかっこいい大人が結構いた。物語にも、かっこいい人物が登場して、あこがれた。今は周囲にかっこいい大人がいないし、作家もかっこいい登場人物を造形できなくなっているのかもしれない」

—大人も生きるだけで精いっぱい

夢を持ち、自分を好きになるように

自分のことが好きだと思うか (東京都教委調べ)



です。

「それでも、親にかかっている。親があこがれの対象にならなければ、子どもは志を立てられない。『しつけは志を付けること』と言った人がいるけれど、本当にその通りだと思う。大人なら、苦しくてもやせ我慢して、かっこいい姿を子どもに見せてほしい」

やまなか・ひさし 1931年北海道生まれ。百貨店勤務などを経て、著述に専念。「あばれはっちゃく」「おれがあいつであいつがおれで」など子ども向け読み物のほか、戦時下の教育について検証した「ボクラ少国民」シリーズなど、著書多数。